新見公立大学紀要　第35巻
pp. 113－118, 2014

研究ノート

A大学看護学部看護学生の地域看護学実習における学生の学び

藤田　彩見*・金山　時恵・矢庭　さゆり

新見公立大学看護学部

（2014年11月19日受理）

本研究は，A大学看護学部看護学科1期生の地域看護学実習における保健所および市町村実習の学生の学びを明らかにし，統合カリキュラムにおける地域看護学実習の方法について検討することを目的に行った。内容分析の結果，学生の学びとして，855のコードが抽出され【対象理解と地域の把握】【地域や他機関・多職種との連携と協働】【地域看護の専門性と特性の理解】【経験・体験からの学びや思い】の4カテゴリーと21サブカテゴリーに分類できた。

学生は，地域で働く看護職の役割・活動，必要な視点を理解し，学びを得ていた。今後，学びを深めるためには，実習での経験・体験のみならず，実習指導者と教員とがより連絡・連携をとりながら学生個々の学びに応じたサポートが必要である。

（キーワード）地域看護学実習，保健師活動，学生の学び

はじめに

A大学の地域看護学領域では3年次前期より後期まで学内において講義を受け，4年次後期に臨地実習を行っている。地域看護学実習は，保健所・市町村実習と，産業保健実習，学校保健実習を内容としている。

近年，保健師教育は9割以上が看護系大学で教育されており，統合カリキュラムでは，4年間で看護師と保健師の二つの国家試験受験資格を取得することができる。しかしカリキュラムの過密さ，看護系大学の急増による実習場の不足とそれに伴う実習期間の短縮化・内容の希薄化の問題，公衆衛生の質そのものの低下などが危惧されている。日本公衆衛生学会では，公衆衛生従事者の質の確保および向上に向け「公衆衛生看護の在り方委員会」を設置し，2007年9月に改定された保健師助産師看護師養成所指定規則で「地域看護学」の構造化，「保健医療福祉行政論」の単位増加，「地域看護学実習」の強化を図っている。また，大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告によると，学士課程における看護系人材養成の目指すものの中に，「学生の資質が変化している中，改正された指定規則の教育内容を充足し，看護専門職の基盤となる資質を獲得させ，長い職業生活のスタートラインに立てる人材を育てるためには何が必要なのか，各大学が自大学の学生の状況や教育環境等を考慮しながら主体的に検討することが重要である」としている[1)2)]。

A大学は2010年4月より4年制大学に移行し，1期生の学生全員が保健師国家試験受験資格を取得する。今回A大学看護学部看護学科1期生の地域看護学実習（保健所・市町村実習）での学生の学びを分析し，統合カリキュラムにおける地域看護学実習の方法について検討することを目的とし，学生の学びを明らかにしたので報告する。

Ⅰ. 研究方法

1．研究対象

2010年度A大学看護学部看護学科入学生63名

2．研究方法

地域看護学実習を終えた学生の実習総括記録用紙（A4版）から学びに関する記述を抽出し，1内容1項目として分類し，意味内容の類似性に基づきサブカテゴリーおよびカテゴリー化した。分析の信頼性を高めるために研究者間で検討を重ねた。

3．倫理的配慮

研究の主旨，研究参加への自由意思の尊重，匿名性の保持と守秘性の保持，成績評価には一切影響しないこと，結果を公表することなどの倫理事項を文書と口頭で説明し，承諾書への署名を持って同意を得た。

Ⅱ. 地域看護学実習における保健所・市町村実習の概要（表1）

A大学における地域看護学実習は，他領域の臨地実習

*連絡先：藤田彩見　新見公立大学看護学部　718-8585　新見市西方1263-2

が終了した8月～11月にかけて，保健所・市町村保健行政における保健師活動を実践的に学ぶために3週間実施する。保健所が1週間，市町村が2週間の日程である。実習前の学内オリエンテーションを2回，3県民局において実施される集中オリエンテーションへの参加，学内での事前学習・事後のまとめ及び産業保健・学校保健実習を含めて単位数は4単位(180時間)である。

1．実習目的（※産業保健・学校保健に特化した目的については省略）

1）地域で生活を営むあらゆる健康レベル，発達段階にある対象の健康と生活を維持増進するための理論と技術を学び，地域看護，地域保健における活動の原則と方法論，看護と保健の専門職としての専門性を理解するとともに倫理観を養い保健師としての実践能力を身につける。

2）地域保健の場における看護と保健の専門性を理解し，専門職としての倫理観を養い，保健師の役割を理解する。

2．実習期間

2013年9月から11月の保健所1週間，市町村2週間（金曜日は帰校日のため1週4日間）の3クールに分かれて実施した（1クール16～24名）。※帰校日の金曜日に各保健所単位でカンファレンスを実施。

3．実習機関

2013年度は県南にある中核市保健所であるB市保健所，県南に位置するC保健所，県北に位置するD保健所・E保健所支所の計6か所及びその保健所管内の19市町村(支所・支局含む)。

4．実習人数

保健所を一つの単位とし，4～6名のグループ，また市町村に関しては，本庁・支所・支局を含めて各2名～4名のグループとした。

5．実習までの事前準備・事前学習

6月に第1回の実習ガイダンスを実施，実習要綱を用いて実習目的，実習目標，「事前学習A」について説明した。

7月に第2回ガイダンスを実施し，実習開始までの流れと「事前学習B」について説明した。学生は1保健所に4～6名のグループで実習を行う。「事前学習A」は実習に行く保健所の概要について各実習グループで課題に取り組む。ホームページや県統計資料から地域特性や保健所の重点目標を知り地域の健康課題を整理する。それぞれの実習保健所はA大学看護学部看護学科の教員および非常勤講師が1名ずつ担当し，学生は教員の指導を受けながら事前課題を仕上げた。あわせて各保健所・市町村の実習目標・学びたいことを「学生紹介シート（県様式）」にまとめ実習保健所及び市町村に提出した。

「事前学習B」では，保健所管内の担当市町村について，学生個々で地域の概要や社会資源，生活環境，健康指標などから地域の健康課題を分析して地域診断をまとめた。その他として担当市町村毎の実習計画を基に参加事業についての事前学習を進めた。

6．実習後の報告会

毎週金曜日に保健所単位でカンファレンスを実施しているが，「実習報告会」は各実習先で学んだ内容を全体で共有し総合的なまとめを行うことを目的に実施した。実習報告会は，1クールごとに実施し，計3回実施した。実習総括レポートはまとめの会終了後2週間以内の提出を求めた。

表1　実習スケジュール例（2013年度）

施設名			保健所 市町村 (県内6保健所及び管内19市町村支所・支局含む)	産業保健	学校保健	※実習前4日間を事前学習(市町村地域診断等)にあてる。 ※実習前週金曜日に実習オリエンテーションを実施。 ※4月末から5月上旬、8月下旬に県実施の集中オリエンテーションに1日参加。
学生数			16～24名	16名	16名	実習方法及び内容
1週	月	実習				保健所オリエンテーション
	火	実習				保健所実習
	水	実習				
	木	実習				保健所実習反省会
	金	学内				学内カンファレンス
2週	月	実習				市町村オリエンテーション
	火	実習				市町村実習
	水	実習				
	木	実習				中間反省会
	金	学内				学内カンファレンス
3週	月	実習				市町村実習
	火	実習				
	水	実習				
	木	実習				保健所・市町村実習反省会
	金	学内				保健所・市町村実習まとめ
4週	月	実習				産業保健
	火	実習				学校保健
	水	実習				産業保健
	木	実習				学校保健
	金	学内				学内での実習報告・まとめ

Ⅲ. 結果

学生の実習総括レポートに記載されている学びを分析した結果，855コードが抽出できた。意味内容の類似性に基づき，21のサブカテゴリーに分類し，さらに4つのカテゴリーに類型した。コードを「　」，サブカテゴリーを＜＞，カテゴリーを【　】と表記した。抽出されたカテゴリーは表2に示した。抽出された4カテゴリーは【対象理解と地域の把握】【地域や他機関・多職種との連携と協働】【地域看護の専門性と特性の理解】【経験・体験からの学びや思い】であった。

1．対象理解と地域の把握

【対象理解と地域の把握】は＜情報収集，アセスメント＞＜住民の声，ニーズを把握する＞＜地区踏査や自分

表2　保健所・市町村実習からの学びの内容の一例

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	主なコード　コード数855
対象理解と地域の把握	情報収集、アセスメント	39	対象や地域特性を理解するため事前の情報収集・アセスメントが重要 現状をアセスメントする基礎知識としてデータを活用する テーマを持って地区踏査、情報収集を行う
	住民の声、ニーズを把握する	42	住民の声やニーズを聴く 住民から話を聞くことでわかることも多くあり、紙面上のデータだけでは把握しきれないことが多いと学んだ 住民の意見を聴くことの重要性
	地区踏査や自分で地域を把握する	27	統計を見るにあたり、数値では見えないものもあるため実際に出かけて確認することも必要 地域住民から直接話を聞くことで統計では分からなかった近隣住民とのつながりや食事内容が分かり地域を理解する方法では地区踏査が一番よい方法と学んだ 地域を歩いたことでその土地の特性や住民の健康意識、住民のコミュニティの場を見ることが出来た
	対象の生活の場、地域を知る	53	風習・慣習が地域での暮らしに関係する 地域の年齢層、仕事を知る 対象者の状況を把握すること、生活している地区の方々との関係を把握する
	背景を理解する	10	一方的に指導するのではなく、その地域の特性や家族の環境などの背景を理解することが重要 住民の行動の背景を理解する 地域の変遷を見る視点
	保健師に必要な視点や能力	111	幅広い視野と多くの知識・技術やスキルが求められる 地域の現状や住民の声を五感で感じ取る力 相手に共感・気持ちに寄り添い、信頼関係の基盤を作る 情報収集・交換・共有、信頼関係を築く、他職種と関わる中でもコミュニケーション力を高める必要がある
地域や他機関・多職種との連携と協働	地区組織の活動・力	8	愛育委員は周りの人への啓発運動をされていたり、民生委員では地域の問題を挙げ、より良い町にするために考えたりしていた 委員一人一人が地域においての目標を捉え何をすべきか把握することで地域の活性化や住民の異変に早期発見・早期対応することができる 愛育委員の日ごろからの活動が健診受診につながる
	他機関・多職種との連携と協働	60	目的に向かって一つになって活動することが連携である 医療・福祉以外にも必要であれば警察や建築関係の職種とも連携を図りながら対象者に関わる 保育士・栄養士・看護師・医師・愛育委員など多職種が各専門性で見守っていくことで必要な支援につなげる連携が取れる
	役割分担、多職種の役割を知る	10	対象者に関わる様々な職種がそれぞれの役割を果たす 役割分担しながら途切れのない支援を行う それぞれの機関がその立場の利点を生かして役割分担をする
	地域や地区組織・地区組織委員との連携・協働	19	住民の健康意識向上のためには行政と地域が支えあって活動していくことが必要 保健師だけでは行き届かないことは愛育委員や栄養委員など他職種の人と協力しあっている 他機関や各委員、ボランティアなどが連携・協働し合い地域一体となって関わっている
	住民同士の連携やつながり	7	対象の周辺の人々同士の連携の重要性 平時から住民同士のつながりを持つことの重要性 在宅療養者を見守るのは看護師・保健師だけでなく、近隣住民や民生委員、地域のクラブ会員などの協力を得ることで地域全体で見守っていく視点が大切
	情報提供・交換・共有を図る、目的・目標の共通認識を持つ	18	健診後スタッフ内でフォローが必要な児を共通認識し、全職種が集まって気になる児を挙げ、情報交換を行う 各職種が事業の目的や目標を共有していることが重要 情報共有・提供を行い健康問題を捉える
	環境づくり	9	他機関が話し合いや情報共有ができる場の提供やネットワーク構築 所内での情報共有をすることで所内連携がしやすい環境を整えている 他機関と連携して円滑に対応できるように準備をすることも重要
地域看護の専門性と特性の理解	個から家族、集団、地域へと結びつけた活動	62	地域で生活する住民の一人一人、家族に目を向け、その健康問題の解決と予防が、地域全体の健康へとつながる 対人的な介入だけでなく、地域や職場、学校という場そのものに事業や計画を通して介入していく活動の幅広さ 家族会を支援していくことで、家族に患者の理解を促すとともに患者の負担を減らす
	保健師の役割や活動	151	キーパーソンとなる人に対する働きかけや指導も大切 対象者の思いや希望を把握し対象者の段階に応じた支援をする 経過の中で対象者を捉え、問題だけを捉えるのではなく、強みを見つけその人の持っている力を引き出すような関わりをしていくことが大切 地域住民が健康に暮らしていくための企画・調整・予算調整・資料集めといった地域活動の基盤づくりの役割 予備群や不安群に働きかけ、健康群に引っ張ること、健康群をより健康にするという一次、二次予防が重要
	住民主体の協力、協働	30	あくまで提案や一緒に考えるということを行い、意見の押し付けをせず、柔軟な考えを持つことが必要 対象者が望んでいることや思いを聞き、支援を押し付けず、相談しながら行うことが重要 住民の声を聴き、住民と同じ立場で考える
	課題から事業、施策化へつなげる	44	地域の健康課題を解消するために重要な事業展開 問題把握から地域に必要な事業につなげる 市の現状や健康課題に沿った事業を計画する
経験・体験からの学びや思い	地域で働く看護専門職について	44	地域で働く看護専門職の役割の必要性や重要性を学んだ それぞれの分野での保健活動について理解できた 地域看護のそれぞれの活動の場の特性や特徴を知ることができた
	保健師活動(訪問・事業、健康教育)からの学び	54	事業へ参加することでその場に応じた保健師の役割の理解が深まった 対象者へのアプローチの仕方について学ぶことが出来た 健康教育では対象の特性を捉え、その人に合わせた伝え方や場の設定を行う必要がある
	今後の課題と目標	24	看護師なら退院後にどうやって予防の大切さを伝えていけばいいのか、これから自分も関わることが多くなると思うので考えていかなければならない 自分にあう何か新しい発見もあると思うので、看護師だけでなく、保健師にも視野を広げてみようと思った 看護師・保健師が患者をバックアップできるような体制を整えることができる看護師になりたいと強く思った
	実習を通して	33	病院から地域へのつながり、継続支援を学ぶことができた 講義で学んだことを実習の場でつなげることで学びを深めることが出来た データから概要を把握することと実習からの学びの統合

で地域を把握する＞＜対象の生活の場，地域を知る＞＜背景を理解する＞＜保健師に必要な視点や能力＞の６つのサブカテゴリーで構成された。

学生は「風習・慣習が地域での暮らしに関係する」「地域の年齢層，仕事を知る」「対象者の状況を把握すること，生活している地区の方々との関係を把握する」など＜対象の生活の場，地域を知る＞ことについて学びを得ていた。

さらに学生は「幅広い視野と多くの知識・技術やスキルが求められる」「地域の現状や住民の声を五感で感じ取る力」など保健師自身の感覚・感性も含めた記述のほかに「相手に共感・気持ちに寄り添い，信頼関係の基盤を作る」「情報収集・交換・共有，信頼関係を築く，他職種と関わる中でもコミュニケーション力を高める必要がある」など＜保健師に必要な視点や能力＞として多くの気づきや学びを得ていた。

２．地域や他機関・多職種との連携と協働

【地域や他機関・多職種との連携と協働】は，＜地区組織の活動・力＞＜他機関・多職種との連携と協働＞＜役割分担，多職種の役割を知る＞＜地域や地区組織・地区組織委員との連携・協働＞＜住民同士の連携やつながり＞＜情報提供・交換・共有を図る，目的・目標の共通認識を持つ＞＜環境づくり＞の７つのサブカテゴリーで構成された。

学生は「目的に向かって一つになって活動することが連携である」「医療・福祉以外にも必要であれば警察や建築関係の職種とも連携を図りながら対象者に関わる」「保育士・栄養士・看護師・医師・愛育委員など多職種が各専門性で見守っていくことで必要な支援につなげる連携が取れる」など＜他機関・多職種との連携と協働＞についても多くの学びを得ていた。

３．地域看護の専門性と特性の理解

【地域看護の専門性と特性の理解】は，＜個から家族，集団，地域へと結びつけた活動＞＜保健師の役割や活動＞＜住民主体の協力，協働＞＜課題から事業，施策化へつなげる＞の４つのサブカテゴリーであった。

学生は「地域で生活する住民の一人一人，家族に目を向け，その健康問題の解決と予防が，地域全体の健康へとつながる」「対人的な介入だけでなく，地域や職場，学校という場そのものに事業や計画を通して介入していく活動の幅広さ」「家族会を支援していくことで，家族に患者の理解を促すとともに患者の負担を減らす」など＜個から家族，集団，地域へと結びつけた活動＞についても多くの学びを得ていた。

学生は「キーパーソンとなる人に対する働きかけや指導も大切」「対象者の思いや希望を把握し対象者の段階に応じた支援をする」「経過の中で対象者を捉え，問題だけを捉えるのではなく，強みを見つけその人の持っている力を引き出すような関わりをしていくことが大切」などの他に「地域住民が健康に暮らしていくための企画・調整・予算調整・資料集めといった地域活動の基盤づくりの役割」「予備群や不安群に働きかけ，健康群に引っ張ること，健康群をより健康にするという一次，二次予防が重要」など＜保健師の役割や活動＞についても多くの学びを得ていた。

４．経験・体験からの学びや思い

【経験・体験からの学びや思い】は，＜地域で働く看護専門職について＞＜保健師活動（訪問・事業，健康教育）からの学び＞＜今後の課題と目標＞＜実習を通して＞の４つのサブカテゴリーであった。

学生は「事業へ参加することでその場に応じた保健師の役割の理解が深まった」「対象者へのアプローチの仕方について学ぶことができた」「健康教育では対象の特性を捉え，その人に合わせた伝え方や場の設定を行う必要がある」など＜保健師活動（訪問・事業，健康教育）からの学び＞として，実際に学生自身が保健師活動を見学，経験・体験できたことで保健師活動，保健師の役割について多くの学びを得ることができていた。

学生は「看護師なら退院後にどうやって予防の大切さを伝えていけばいいのか，これから自分も関わることが多くなると思うので考えていかなければならない」「自分にあう何か新しい発見もあると思うので，看護師だけでなく，保健師にも視野を広げてみようと思った」「看護師・保健師が患者をバックアップできるような体制を整えることができる看護師になりたいと強く思った」など実習を通し，学生自身が将来看護職としてどのように活動していくか，学生それぞれの＜今後の課題と目標＞を考えることにつなげていた。

Ⅳ．考察

学びの内容を分析した結果，＜対象の生活の場，地域を知る＞＜保健師に必要な視点や能力＞＜他機関・多職種との連携と協働＞＜個から家族，集団，地域へと結びつけた活動＞＜保健師の役割や活動＞＜保健師活動（訪問・事業，健康教育）からの学び＞に関するサブカテゴリーのコードについて，多くの学びの記述がみられた。綾部らが，「学生は，保健師教育課程の入り口で最も基本的な保健師や保健師活動のイメージづくりが難しい」と述べており[3]，また五十嵐らが行った学生の実習経験と実習評価に関する研究[4]や下村らが行った保健師活動の体験とその意味付けの研究[5]と同様に本研究においても学生は保健師や保健師活動について実習にでるまでは保健師や保健活動を具体的にイメージがしにくいと考えられる。そのため，学生自身が実習の中で，保健師活動を実際に経験または見学できたことで，地域で働く看護職として必要

な視点や能力，コミュニケーション技術などを学ぶことにつながっている。さらに，保健師の支援や役割・活動を目の当たりにし，地域住民に対する支援を行っている姿から他機関・多職種との連携・協働の必要性を捉えられている。

支援を行っていくためには，対象者や対象者が生活する場・地域を知ることが必要であるという学びにつながったと考える。さらに，個人が抱える問題や課題を家族，集団，地域へと結びつけながら問題や課題の把握に努め，事業を実施，展開しながら施策化につなげていくなど地域の健康課題に取り組むという地域看護の専門性について理解することができたといえる。

佐伯は，「入院期間の短縮や在宅療養が進む中，地域看護学の学びは看護師にも求められている。また，看護師が保健師の役割や活動を理解していく上でも重要である」と述べている[6]。A大学は領域実習を終えた後に地域看護学実習を行っているが，「看護師の立場からも地域に帰る患者さんのことを考えて看護を行いたい」「看護師・保健師が患者をバックアップできるような体制を整えることができる看護師になりたいと強く思った」など将来看護師として就業を希望している学生にとっても地域看護学および地域看護学実習での経験・体験，学びは医療機関と地域との連携の必要性や患者という視点だけではなく生活者として対象を捉えること，また生活を見ていく視点など多くの学びを得られたことは大きな成果である。医療と保健との連携のみならず，入院患者が退院後どのような生活を送っていくのかを具体的にイメージすることにつながり，看護職者として視野の広がりにつながったものといえる。

学びの中で「自分にあう何か新しい発見もあると思うので，看護師だけでなく，保健師にも視野を広げてみようと思った」と記述している学生もおり，保健師に対する興味や関心の少ない傾向にあった学生にとっても看護職者が活動する多様な場を経験し体験できたことは，職業選択や看護観の広がりにもつながったものと考える。下村らは，「学生の実習体験を学びへと結びつけるための教員や実習指導保健師の意図的な関わりが重要である」と述べている[7]。A大学では各保健所・市町村で反省会を行い，金曜日に学内カンファレンスを行っているが，反省会で学びを共有するだけではなく，翌日に学内カンファレンスを行い，保健師が行う支援や事業展開などの意味付けや確認などを教員がフォローすることができ，より多くの学びや思いを得ることにつながったと考える。また野原らは，「クール毎の全学生による「まとめの会」では，異なる実習施設での学びをグループ毎に発表し合い，学生同士の情報交換や教員の助言を行った。この「まとめの会」が，実習の学習内容を補完し深めることに重要な場である」と述べている[8]。A大学も毎週金曜日のカンファレンスと実習終了後に実習報告・まとめの会を設けているが，学生同士がそれぞれの情報を交換し，学びを共有することも実習期間の中では重要と考える。

しかし，上記のコードのような学びや思いを得た学生は一部であり，学生の学びの記述に関して，一人あたりのコード数が3-39と学びに大きな差がみられている。下村らは，「保健師の説明を受身的に聞くだけでは学びは得られにくいと予測されるため，学びたいという意欲やこれを学ぶという学習の視点を持つこと，事前学習を通して，学生の実習に臨む準備状況を高めることが重要である」と述べているように[9]，看護基礎教育課程で行う保健師教育，地域看護学実習を看護師希望の学生にとっても，より学びの多いものにするためには実習までの事前学習段階で学生の意欲を高められるようにすること，また実習に出てからも教員と実習指導者が学生の状況を踏まえながら学びをサポートしていくことが重要であると考える。末永らは「地域看護学における臨地実習は，学生にとって，実践の場で起きている様々な現象の意味を確認するとともに，大学で学んだ既習の知識や理論と照合していくプロセスである」と述べている[10]。A大学では実習前の事前学習で実習市町村の地域診断を実施している。臨地実習で受け持った様々なライフステージにある患者が地域ではどのように生活しているのかなど臨床と地域がつながるようにイメージを持たせること。また既習の知識と理論とが統合できるように地域の現状を捉えた地域診断を進めていくこと。事前学習で実習に対する意欲を高めていくことで，実習の現場で起こっている状況と保健師の活動との意味付けができ，更なる実習での学びにつながると考える。また学生の学びをさらに深めるためには，学生の状況について，教員と実習指導者が情報交換・共有しながら学生の学びの状況にあわせた指導を行うことが必要と考え，今後も学生の学びが深まるよう，指導の充実が図れるように取り組んでいきたい。

研究の限界として，今回，地域看護学実習総括記録からのみコードを抽出しており，学内カンファレンスや学内での実習報告・まとめの会についての発言や記録については分析対象としていない。また実習における経験・体験との関連や目標に対する到達度の自己評価との関連についても分析していない。今後は経験・体験と学びの関連や自己評価への影響などを分析し，限られた期間の中で，学生がよりよい実習・学びにつなげていくための検討が必要と考える。実習期間の中に学内カンファレンスを設けているため，学生の実習目標に対する到達度の自己評価も確認しながら到達できていない目標に対して，実習指導者および教員が協働して支援できるよう努めていきたい。

文献

1）日本公衆衛生学会：公衆衛生看護のあり方に関する委員会(第４期)報告書．5-6，2011.
2）文部科学省高等教育局医学教育課：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告,2011.
3）綾部明江，富岡実穂，木下由美子：保健師志望学生が望む保健師教育のあり方－Ａ大学４年生の意見を通して－．茨城県立医療大学紀要，17，51-58，2012.
4）五十嵐久人，尾上佳代子，鶴田来美他２名：地域看護学実習における実習経験内容と自己評価．南九州看護研究誌，5(1)，61-65，2007.
5）下村聡子，安田貴恵子，酒井久美子他３名：地域看護実習での体験を通して得られた学生の学び－市町村および保健所における実習に焦点をあてて．長野県看護大学紀要，14，35-49，2012.
6）佐伯和子：看護学生が学ぶ地域看護学とは．看護教育，53(1)，363-369，2012.
7）前掲書，５），35-49
8）野原真理，若林千津子，山口絹世他１名：地域看護学実習の展開方法の検討－学生の実習経験と自己評価からの分析－．医療保健学研究，4，27-39，2013.
9）前掲書，５），35-49
10）末永カツ子，瀬川香子，鈴木和広他１名：大学における保健師教育に関する考察－地域看護学実習の展開過程と学生の学びを通して－．東北大医保健学科紀要，16(2)，69-79，2007.